

## 令和5年度 佐久地域の水稲の生育概況

佐久農業農村支援センター

播種作業は4月上旬よりJAや大規模農家で始まり、4月15～16日頃ピークを迎えた。4月25日の低温によりムレ苗の発生が散見されたが、その後回復し大きな問題とはならなかった。5月上旬にはハウス内の高温による苗のヤケが散見された。

田植えは5月12日頃より本格的に始まり5月20日現在最盛期を迎えたが、5月23日に強い冷え込みがあったことから、5月下旬に移植した圃場では移植直後に気温が下がって活着が遅れ、しばらく葉色が出ず、分けつが少ない傾向にあった。活着の遅れから、漏水田や重粘土質圃場にて除草剤の薬害が散見された。

6月中旬以降は気温が上がり、活着が遅れた圃場もおおむね生育が回復した。イネミズゾウムシや藻類の発生はやや多い傾向にあったが、生育への影響は少なかった。

定点圃場では、「あきたこまち」など早生品種については7月7日あたりから、「コシヒカリ」など中生品種については7月13日あたりから幼穂が確認されるようになった。7月中旬よりいもち病の病斑が確認されたが、極一部のほ場を除き病徴の拡大は見られなかった。

出穂は、5月中旬植えのほ場で8月4日頃、5月下旬植えのほ場で8月6日頃にピークを迎えた。全体的に短稈傾向だが、晩植の「コシヒカリ」では平年並みに丈が伸びた。地力窒素の発現が多いためか、成熟が進むにつれ倒伏の発生面積が拡大した。穂いもちの発生は、ほぼ見られなかった。

成熟期は、8～9月の気温が高く推移したことにより、平年に比べ9日ほど前進した。「あきたこまち」など早生品種については9月始めから収穫が始まった。主力の「コシヒカリ」は9月18日頃から本格的に収穫が始まり、9月28日頃に収穫のピークを迎えた。収穫時の玄米水分が低く、例年に比べ胴割れ米の発生は多かった。特に、収穫前に早めに落水したほ場において胴割れの程度が大きい傾向にあった。玄米は、やや小粒傾向であったが、ある程度厚みがあり、外観は概ね良好であった。高温登熟により心配された白未熟粒の発生は、比較的になかった。

定点ほ場の収量調査の結果、「あきたこまち」についてはやや減収、「コシヒカリ」については平年並みであった。早生品種の減収要因としては、活着の遅れにより分けつが抑制され、茎数が少ない状態の中で7月上旬に幼穂形成を迎えてしまったため、穂数の減少を籾数や登熟歩合でカバーしきれなかったためと考えられる（「コシヒカリ」についても活着不良田では同様の現象が生じたものと推測される）。